

能登・北加賀の山間寺院遺跡

松山 和彦

1. はじめに —これまでの流れ—

- 出越 茂和 1998 「古代石川における山と里の寺」『杉野屋専光寺遺跡』
石川県志雄町教育委員会
- 松山 和彦 1998a 「北陸における古代寺院の一様相」『越前・明寺山廃寺』
福井県清水町教育委員会
- 松山 和彦 1998b 「白山信仰の展開と禅定道の成立」『信仰の道』
歴史の道調査報告書第五集石川県教育委員会
- 出越 茂和 1999 「古代北陸における官寺・山寺・里寺」『北陸の考古学Ⅲ』
石川考古学研究会々誌第 42 号
- 久保 智康 1999 「国府をめぐる山林寺院の展開—越前・加賀の場合—」
『神護寺 薬師如来像の世界』国宝と歴史の旅 3 朝日新聞社

2. 寺院遺跡の類型化

- 直木 孝次郎 1968 「日本靈異記にみえる「堂」について」『奈良時代史の諸問題』
塙書房(初出は 1960)
寺・・・官・国または有力な貴族・豪族によって建てられ、寺院としての体面を整えているもの
山寺・・・僧侶の修行の場所、国家あるいは特定の貴族・豪族や村落との関係がほとんどみられない
堂・・・村落との関係が深い(地名+堂)、常住の専門僧侶がいない
建物もあまり立派なものであったとは思われない、本尊は木像が多い
村の有力者または村人の力によって建てられる場合が多い
※大体の傾向を示す
※堂には寺との中間形態もある(沙弥・優婆塞が居住することによって「道場」)
- 笹生 衛 1998 「古代集落と仏教信仰—千葉県内の事例を中心に—」
『仏のすまう空間—古代霞ヶ浦の仏教信仰—』上高津貝塚ふるさと歴史の広場
・伽藍が整った寺院遺跡以外でも、集落遺跡で仏教関連の遺構・遺物が確認されるようになる
遺物 墨書土器・瓦塔・仏像・仏具
遺構 A. 四面庇建物(Ⅰ坪地業建物、Ⅱ基壇建物、Ⅲ掘立柱建物)
B. 方形・内陣建物(Ⅰ基壇建物、Ⅱ掘立柱建物)
C. 側柱建物(Ⅰ掘立柱建物、Ⅱ小規模な掘立柱建物=瓦塔覆屋など)
D. 建物不明 ※A～Cは階層差

遺跡の類型

第1類型 AⅠ～Ⅲ・BⅠ～Ⅱ類

儀礼用の礼堂や僧房風の建物伴う、集落と仏堂が離れて存在

→本格的な仏教儀礼(修法)可能

国分寺・郡寺・定額寺の別院?

第2類型 AⅢ・BⅡ類

1堂形式、神祇信仰に関する墨書土器も出土

→拠点集落の大規模な村寺

第3類型 CⅠ類

1堂形式、神祇信仰に関する墨書土器も出土

→集落内の小規模な村寺

第4類型 CⅡ類

招福攘災的色彩強い

→集落内の村堂

(第5・6類型は墨書土器・仏具のみ)

3. 石川県下の古代山間寺院遺跡ほか (能登・北加賀を中心に)

A 1つの堂からなるタイプ

①宿向山遺跡南側調査区(羽咋郡押水町)

砂丘後背の狭い平野に接する丘陵尾根の南側、標高 37m 前後の地点に面積 100 m²程度の区画溝を伴う小テラスが設けられている。そこでは掘立柱建物の柱穴が数基確認されているが、建物の配置は不明。

小テラスに存在した建物から投棄されたと考えられる遺物が、下の斜面を中心に得られており、一部は土器溜まりを形成する。遺物には灰釉陶器手付瓶(K90号窯式)・椀(053号窯式)、須恵器多口瓶、土師器三足盤・脚付香炉・大型の有台鉢など特殊なものが含まれる。また、無台の杯・椀類には灯明痕がみられるものが目立つ。その他、周辺の斜面からは30本を越える鉄釘が出土している。

②杉谷チャノバタケ遺跡B地区(鹿島郡鹿西町)

邑知地溝帯の北側、眉丈山系南斜面の中腹(標高約70m)、弥生時代の大型竪穴住居跡が埋積した小テラスに立地する。10m四方のテラスの西に偏して2×2間の掘立柱建物1棟が検出され、その柱穴及びテラス下斜面から11世紀頃の土器が出土している。掘立柱建物を囲むように壁が焼土化した土坑と炭粒を充填した土坑各1基を1セットとするものが都合3セットみられる。なお、須恵器甕胴部片には赤色顔料(朱墨?)が付着したものがある。

※ Aタイプについては、平坦面の面積が狭いことに加えそこに建てられた建物の棟数が1棟前後に過ぎないことから、僧侶が常住せず儀式のみが執り行われた「堂」としての性格が想定される。また、建立・維持には周辺の比較的狭い(恐らく郷域を超えない)範囲の村落が密接に関わったと推定される。

※近年、平野部に位置する③松任市源波遺跡Ⅱ区において「宗教施設」とされる周溝を伴った特殊な掘立柱建物が検出されている。当時の集落域からやや離れた地点を占め、8世紀後

半の創建以来9世紀にかけて数度の建て替えが認められるという。恐らくこれも機能面、すなわち「村堂」的な宗教施設という意味では①・②と大きく異なるところがないと思われる。したがって、Aタイプを「山間寺院」・「山林寺院」の範疇で理解すべきか疑問が残る。

B 主要堂宇に2棟程度の建物が付属するタイプ

- ・南加賀では調査例・・・里川E遺跡・八里向山B遺跡(小松市)
- ・北加賀では発掘例はないが、平坦面の規模からこれに近いと推定されるものがある

④夕日寺B遺跡(金沢市)

平野から金腐川を4km程遡った、同川右岸の標高約150mの丘陵南斜面に27×18mの不整な半円形を呈する「ドウヤシキ」と呼ばれる平坦面があり、林道工事により平安後期～鎌倉期の土師器・鉄釘が出土した。この地は夕日寺の本尊である千手観音がかつて祀られていた場所と伝承される。

⑤額谷御廟谷遺跡(金沢市)

平野から七瀬川を1km程遡った標高約160mの丘陵西斜面に32×14mの平坦面があり10世紀後半を中心とする時期の土器が採集されている。

近接して県指定史跡「御廟谷」=富樫一族のものと伝える五輪塔群があり、中世陶器が採集されているところから、中世まで周辺で寺院が展開した可能性がある。

C 主要堂宇を中心に僧房群が取り囲むタイプ

- ・南加賀では調査例・・・浄水寺遺跡(小松市)

Ⅱ期・・・「中房」・「中室」・「南房」・「南室」・「仁房」など僧房を示す墨書土器

→各平坦面の建物に対応?

「三坂□」・「吉谷寺」など白山禅定道沿いの地名に関する墨書土器

→より広い信仰圏

D 本寺に付属した修行のための山寺と考えられるタイプ

(山中の平場に建物が整然と配列されるタイプ)

⑥三小牛ハバ遺跡(金沢市)

平野から伏見川を2km程遡った標高約145mの丘陵斜面の平場に立地する。平場は100×60m程と広く、元来平坦な自然地形であったと考えられる。発掘の結果、8世紀後半から9世紀にかけての掘立柱建物12棟(建て替え含む)、竪穴住居跡4棟が検出されている。

遺物としては銅板鋳出仏(採集品)、三彩小壺をはじめ、須恵器水瓶・鉄鉢、土師器ではループ状暗文をもつ赤彩の鉢などがあり、また200mばかり離れた三小牛サコ山遺跡からは580枚にのぼる和同開珎が発見されている。なお文字資料としては「三千寺」・「沙弥」などの墨書土器、「□山寺」の木簡、写経用定木と考えるものなどが知られる。その他、転用硯として使用されたもの、須恵器無台杯を中心に灯明痕がみられるものが目立つ。

※三小牛ハバ遺跡については遺物の特異さに目が奪われがちだが、開墾などにより礎石建物が失われてしまっている可能性が残るものの、それに比して建物が貧弱という感は免れない。やはり、本遺跡例と平野部の瓦葺きの伽藍を有する寺院(末松廃寺)との間における補完関係を指摘する戸潤幹夫氏の見解が卓見であり、「沙弥」が修行する「山寺」すなわち、山沙弥

所としての性格を想定すべきであろう。

E 本格的に整備された山林寺院と考えられるタイプ

(加賀国における真言別院としての高雄山寺)

⑦高雄山寺推定地(金沢市)

『類聚国史』に承和 6(839)年に加賀国高雄山寺が真言別院となったことが記されている。従来、この高雄山寺は金沢市高尾町地内にあったと伝承されてきた。文献⑦ではその「遺跡らしきものも確認されていない」とする一方、高尾町の山中に寺院が存在した地区があるとする矛盾した記述がみられる。早速現地を踏査したところ水場などで9世紀頃の土器の散布が確認され、有力な推定地であることが判明した。

未調査ではあるが、少なくとも120×70mほどの範囲に平坦面の造成が認められ、一部に基壇状の隆起も観察される。前述のCタイプと関係でいえばより大規模で伽藍の整備が進んだ観があり、Dタイプとの比較では本寺とすべきものであろう。

採集遺物の年代観から、創建は承和6年を大きく遡らないとも予想される。

F (延喜式内社の)神宮寺と考えられるタイプ

⑧額谷カネカヤブ遺跡(金沢市)

七瀬川という小河川の谷口に臨む、山麓の南斜面を占地する。標高は55m前後。発掘調査の結果、古代は8世紀末から9世紀中頃を主体とし、須恵器には鉄鉢形・脚付香炉?が含まれ、無台杯を中心に灯明痕が目立つなど仏教的性格がみられる。遺跡付近はかつて「額山」と呼ばれ、長享の一揆(1488年)の頃まで延喜式内社「額東神社」が鎮座した場所と伝承される。古代の遺物にみる特色からその神宮寺の存在を想定することもできる。

※この遺跡の注目すべき遺物として埴(せん)があげられる。古代に属するものか、中世(14・15世紀頃)に属するか興味深い。

古代の例 福井県丸岡町箱屋谷遺跡

中世後期の例 石川県中島町定林寺前遺跡

G 生産遺跡に仏教色がみられるタイプ

・北加賀・能登では明確な例はみられない

・南加賀 能美丘陵 庄ヶ屋B遺跡 小鍛冶炉+須恵器鉄鉢形・水瓶

・越中 射水丘陵 流団No.16遺跡 須恵器窯+「小椅寺」・印仏・円面硯

流団No.18A遺跡 土師器窯+「優塞」優婆塞?

※大寺院が伽藍を維持するため、柚などとして丘陵の一角を占定し、そこで優婆塞などの修行者が手工業生産に従事するケースもあったのではないか。

H 山中の修行地と考えられるタイプ

⑨倉ヶ岳山頂南遺跡(鶴来町)

倉ヶ岳(565m)山頂の南側の岩壁の下で、大池(湧水)に臨む場所から8世紀後半～9世紀初頭の遺物が採集されている。

⑩医王山・三千坊跡(金沢市・富山県福光町)

医王山の県境稜線上の標高 800m の三千坊と呼ばれる場所から、8 世紀後半頃の土器が採集されている。ここよりやや北方の金山峠から加賀側に下れば、森下川源流付近に医王山山中の行場と目される大沼平(湧水池群)、鳶岩、三蛇が滝に出る。

※ともに山中の湧水池を意識した立地とみることもでき、山間寺院が立地する場―「山」のもつ水源としての側面に注意を払う必要がある。

I その他特筆すべきもの

⑪福水ヤシキダ遺跡(羽咋市)

平野部から飯山川を 2 km 程遡った谷底低地の一角に立地する。標高約 35m の山裾の棚田において、1968 年、銅三鈷鏡 1 柄、銅錫杖 2 頭、銅椀 3 口が農作業中に偶然発見され、3 年後に羽咋市・石川考古学研究会が周辺を小規模発掘し、関伽井と目される井戸状遺構 1 基を確認している。仏具類はまさに井戸端に埋納されていたようである。井戸状遺構は周辺からの遺物から 9 世紀頃に属すると考えられ、その点は櫻井氏の考える仏具の製作年代「奈良時代から平安時代初期」とも矛盾しない。

なお、鏡は東大寺修二会(お水取り)にも用いられる仏具で、雑密系の三鈷鏡は全国的にも稀少という。福水地内にはかつて真言宗の福水寺があったと伝承されるが、それとこの遺跡との関連は不詳である。なお、丘陵を挟んだ反対側、西方 1.5km には軒丸瓦、「東院寺」・「東寺」・「寺鉢」・「岡本」(「和名抄」の郷名か)の墨書土器を出土した杉野屋専光寺遺跡(志雄町・文献⑫)があり、時期的にも並行する部分が大きく両者の関係も考慮されねばならないだろう。

【文献】

- ①『宿向山遺跡』1987 石川県立埋蔵文化財センター
- ②『谷内・杉谷遺跡群』1995 石川県立埋蔵文化財センター
- ③『松任市源波遺跡 II』1997 松任市教育委員会
- ④岡本晃 1984 「夕日寺 B 遺跡出土遺物」『石川考古 156』石川考古学研究会
山下智・松山和彦 1991 「夕日寺 B 遺跡(ドウヤシキ)の再評価」『石川考古 207』石川考古学研究会
- ⑤宮本哲郎「額谷御廟谷遺跡について」1993 『石川考古学研究会々誌第 36 号』
- ⑥『三小牛ハバ遺跡』1994 金沢市教育委員会
戸潤幹夫 1992 「遺跡・遺物が語る白山信仰の軌跡」『白山―自然と文化』橋本確文堂
佐久間竜 1959 「山沙弥所と山林師所」『続日本紀研究』第 6 巻第 12 号
- ⑦『高尾城跡分布調査報告書』(金沢市文化財紀要 83)1990 金沢市教育委員会
- ⑧『金沢市額谷カネカヤブ遺跡』1995 金沢市教育委員会
- ⑨松山和彦 1990 「倉ヶ岳山頂南側採集の古代遺物について」『石川考古 203』石川考古学研究会
- ⑩「三千坊跡」『医王山文化調査報告書医王は語る』1993 富山県福光町
- ⑪櫻井甚一 1982 「結語」『丹治山福水寺遺跡』羽咋市教育委員会
櫻井甚一 1983 「福水出土の古密教仏具からみた能登の山林宗教考」『北陸の考古学』
- ⑫『杉野屋専光寺遺跡』1998 志雄町教育委員会

4. 古代山間寺院遺跡の背景

(1) 神仏習合と神宮寺の建立

- ・ 古代村落において神仏習合が展開しはじめるのは 8 世紀半ば以降
河音能平「若狭国鎮守—二宮縁起の成立」『中世封建制成立史論』東大出版会
- ・ 8 世紀後半以降の小規模寺院遺跡の急速な広がり
神仏習合=在地における共同体祭祀(攘災招福)の仏式化
- ・ 神宮寺…北陸西部に早期の例が目立つ、「神身離脱」
気比神宮寺(越前) 靈龜元(715)年に藤原武智麿が、気比神の夢の託宣により神宮寺を建立
『藤氏家伝』下巻
若狭神宮寺 養老年間(717～724)に疫病が蔓延、天候不順により凶作続く。和朝臣
赤麿、深山を練行し、若狭比古神と交感し、その願いにより神願寺を
建立。『類聚国史』

※山林修行で山の地主神の心を感じ、神の願いにより神宮寺を建立

(2) 純密の波及と白山信仰の展開(松山 1998b)

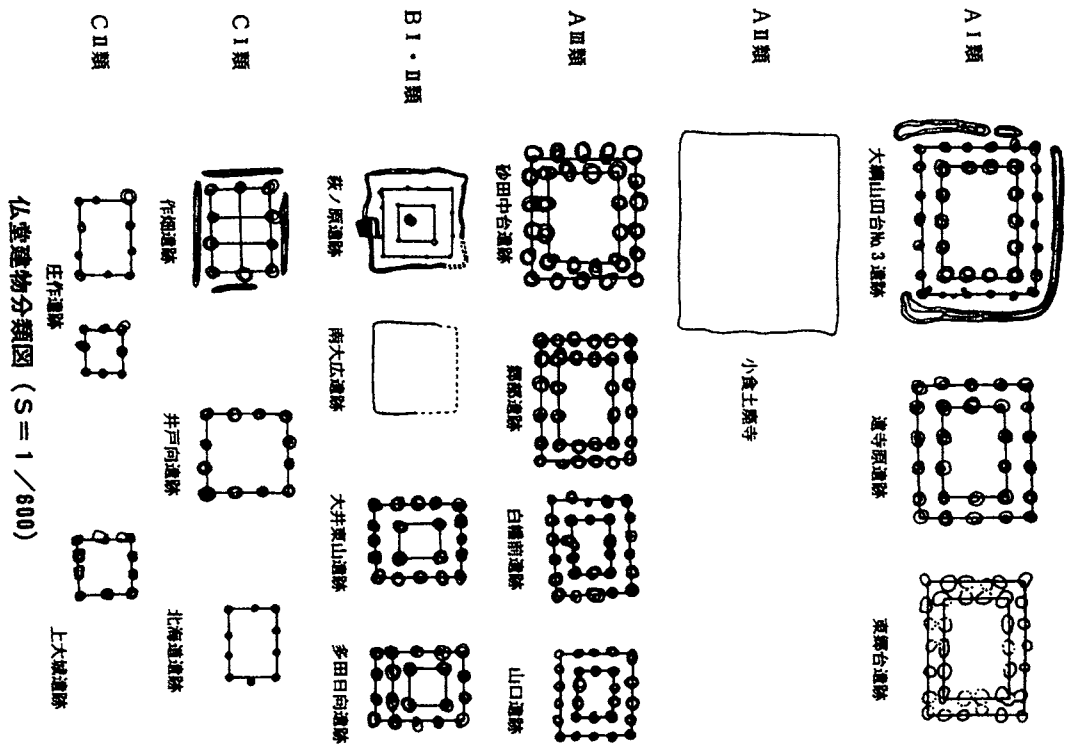
823(弘仁 14)	加賀国立国	
832(天長 9)	白山の加賀馬場が開かれる	『白山記』
839(承和 6)	加賀国高雄山寺を真言別院とする	『類聚国史』
承和年間頃	天台僧・宗叡が白山に登る	『三代実録』
878(元慶 2)	石川郡止観寺を天台別院とする	『三代実録』
々	度賀尾寺(高山寺)の賢一が白山に登る	『高僧伝要抄』
9 世紀後半	白山山頂付近で遺物が確認されるようになる	
10 世紀	中宮三社の整備が進む	『白山記』
12 世紀中頃	加賀の白山本宮の末社が広汎に展開	『白山記』

※ 9 世紀に純密系の僧侶による白山登拝が本格化し、10 世紀には国府から白山へ向かう途次における社殿・仏閣の整備が進む。12 世紀までには加賀の本宮(別当白山寺)を頂点とする本末関係による信仰のネットワークが完成

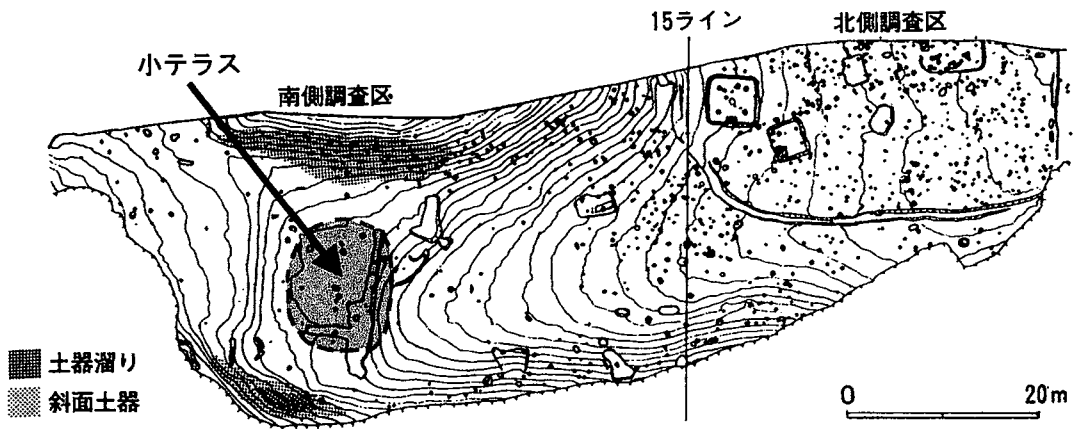
※ 加賀では平安時代を通じ山の宗教が白山信仰に収斂される傾向

(3) 寺院遺跡の断絶と継続

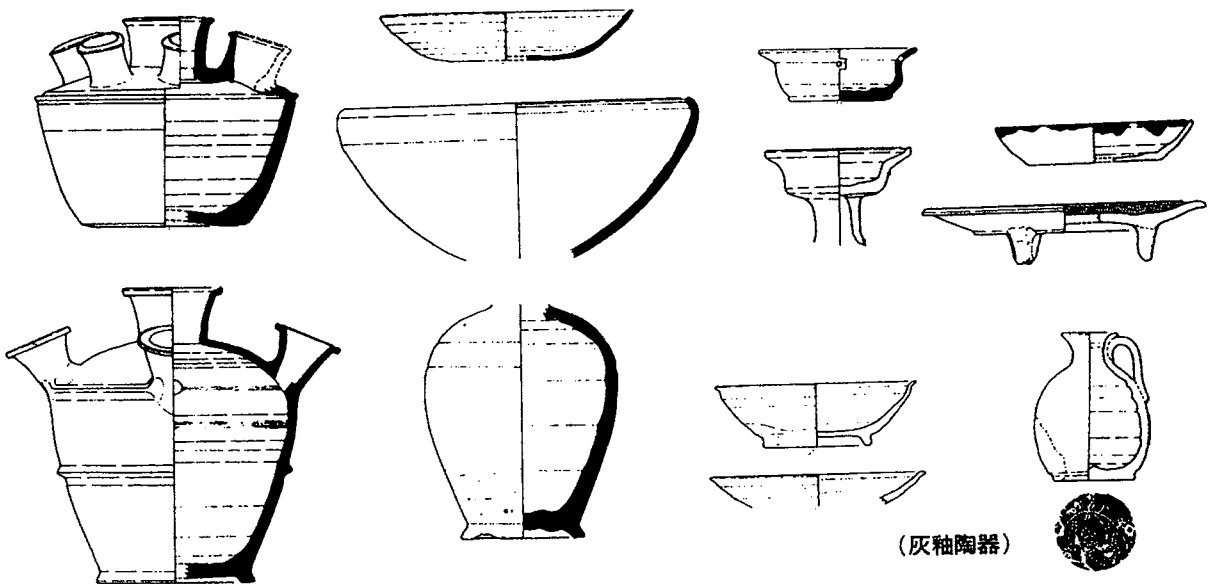
- ・ 8 世紀後半から 9 世紀までのものは 10 世紀に断絶するケースが多い
※ 寺院遺跡を支える集落遺跡も同様な傾向を辿る
※ 郡領層など檀越としての伝統的な在地有力者の没落
※ 標高の低いこれまで信仰の山(倉ヶ岳など)にかわって、白山が指向される
- ・ 10 世紀以降平安後期に盛んとなるものは中世まで継続するケースが多い
※ 10 世紀から急速に来世の救済と現世利益を求めて観音信仰が盛んとなる平安後期には観音を本尊とする寺院を巡礼(西国三十三所観音)
※ 加賀では白山信仰のネットワークに包摂されつつも独自の地方霊場として命脈を保つ?。聖(所属寺院から隠棲し民衆教化)の活動拠点?



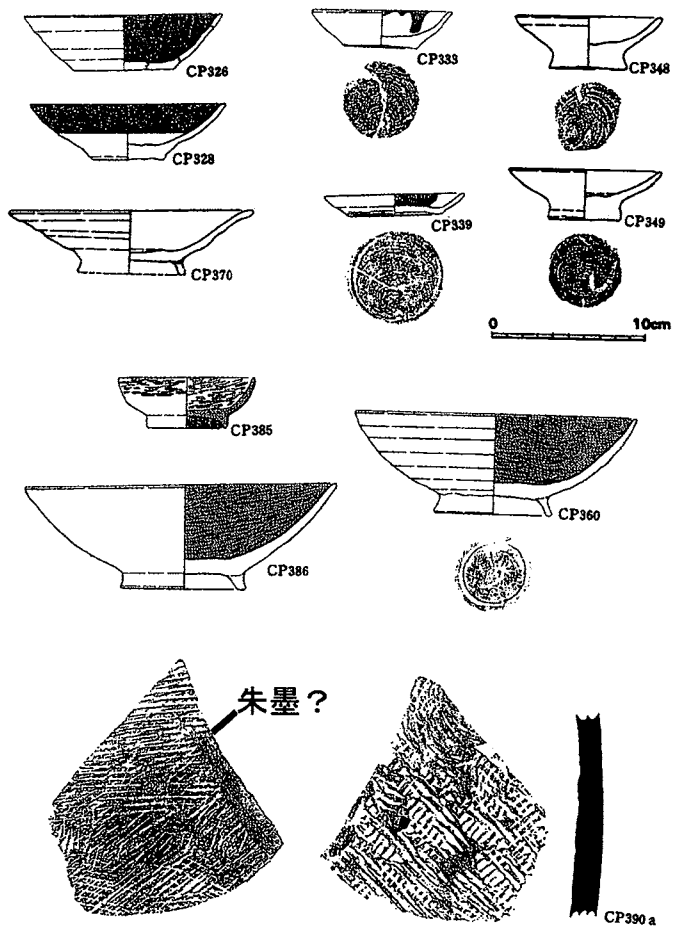
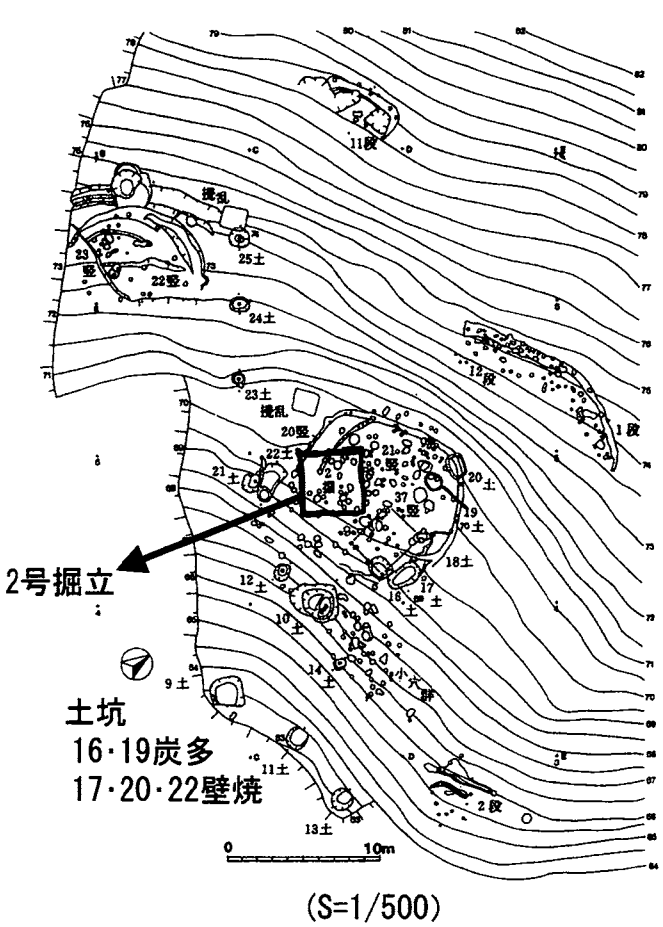
千葉県的事例 (笹生 1998)



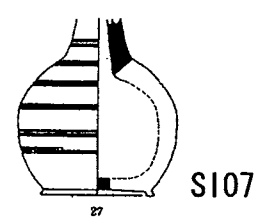
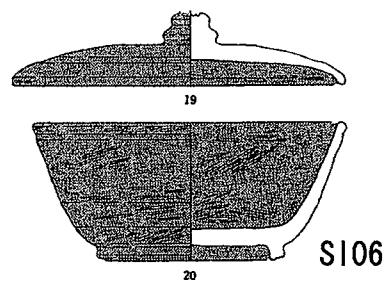
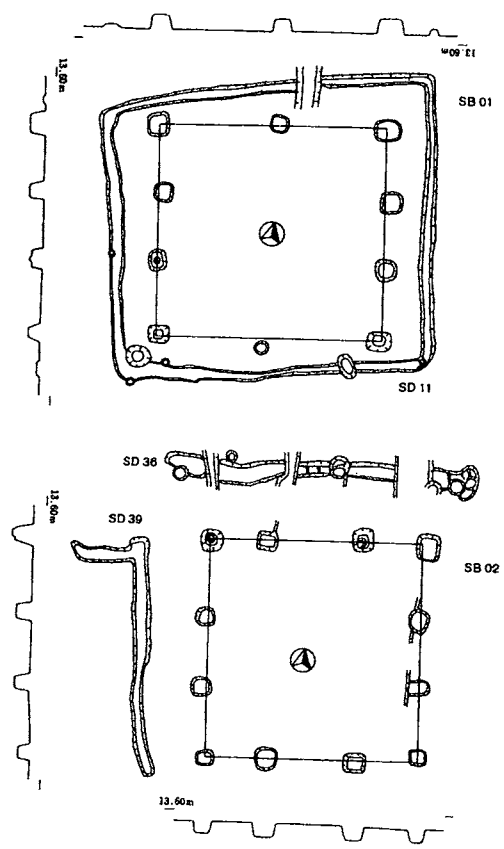
(S=1/800)



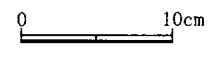
①宿向山遺跡 (押水町)



②杉谷チャノバタケ遺跡B地区 (鹿西町)



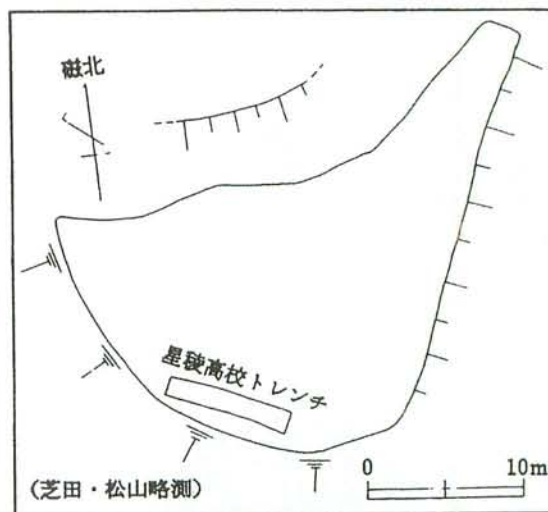
(S=1/160)



③源波遺跡Ⅱ区 (松任市)

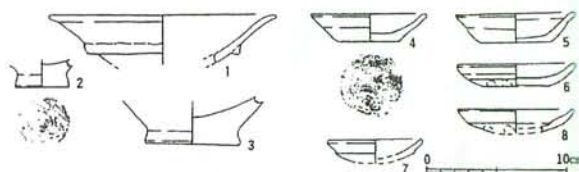
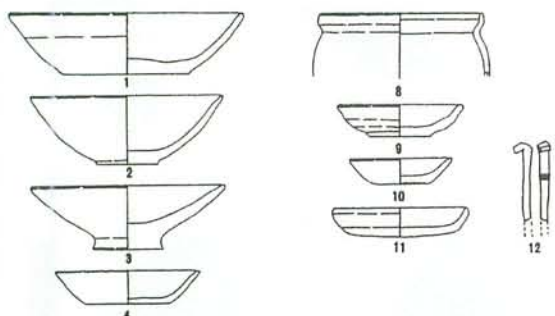


位置図 (S = 1/25000)

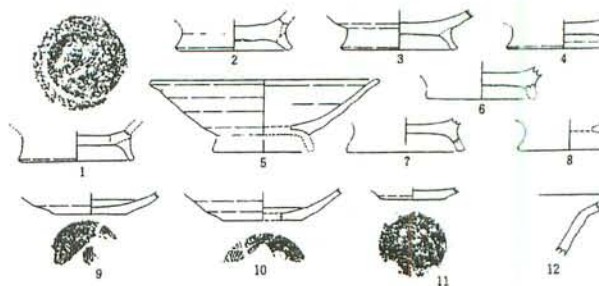
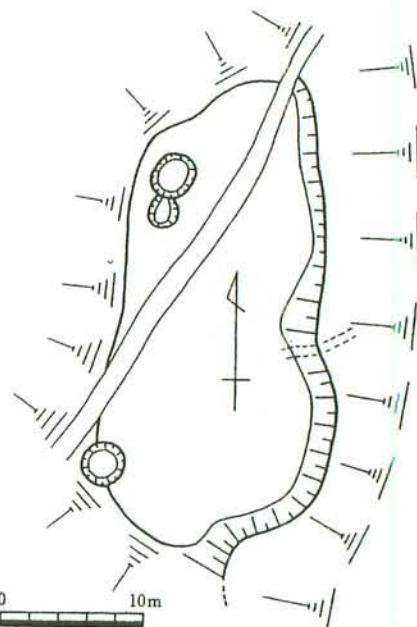
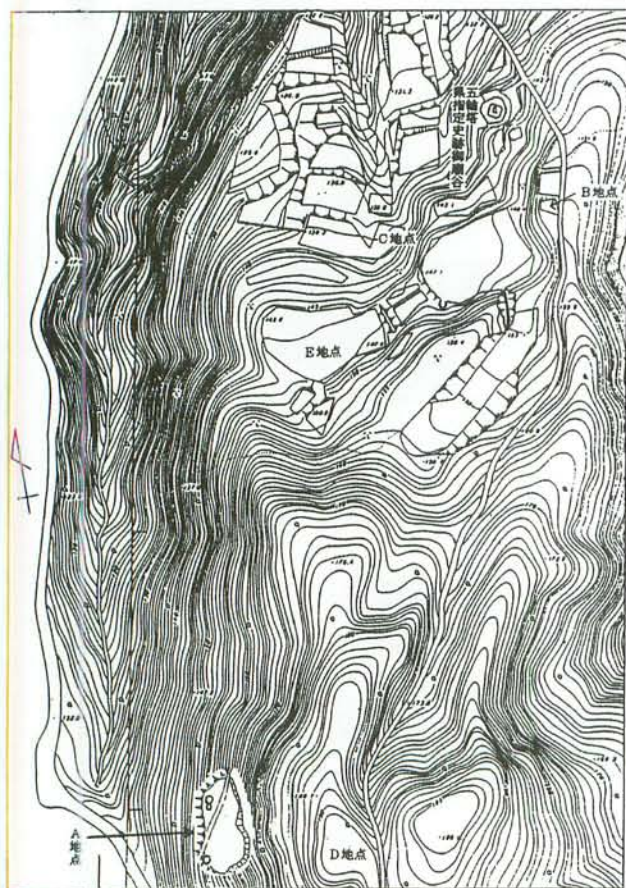


(芝田・松山略測)

主要平坦面略測図 (S = 1/500)



④夕日寺B遺跡(金沢市)



⑤額谷御廟谷遺跡A地点(金沢市)

⑥三小牛ノ遺跡 (金沢市)

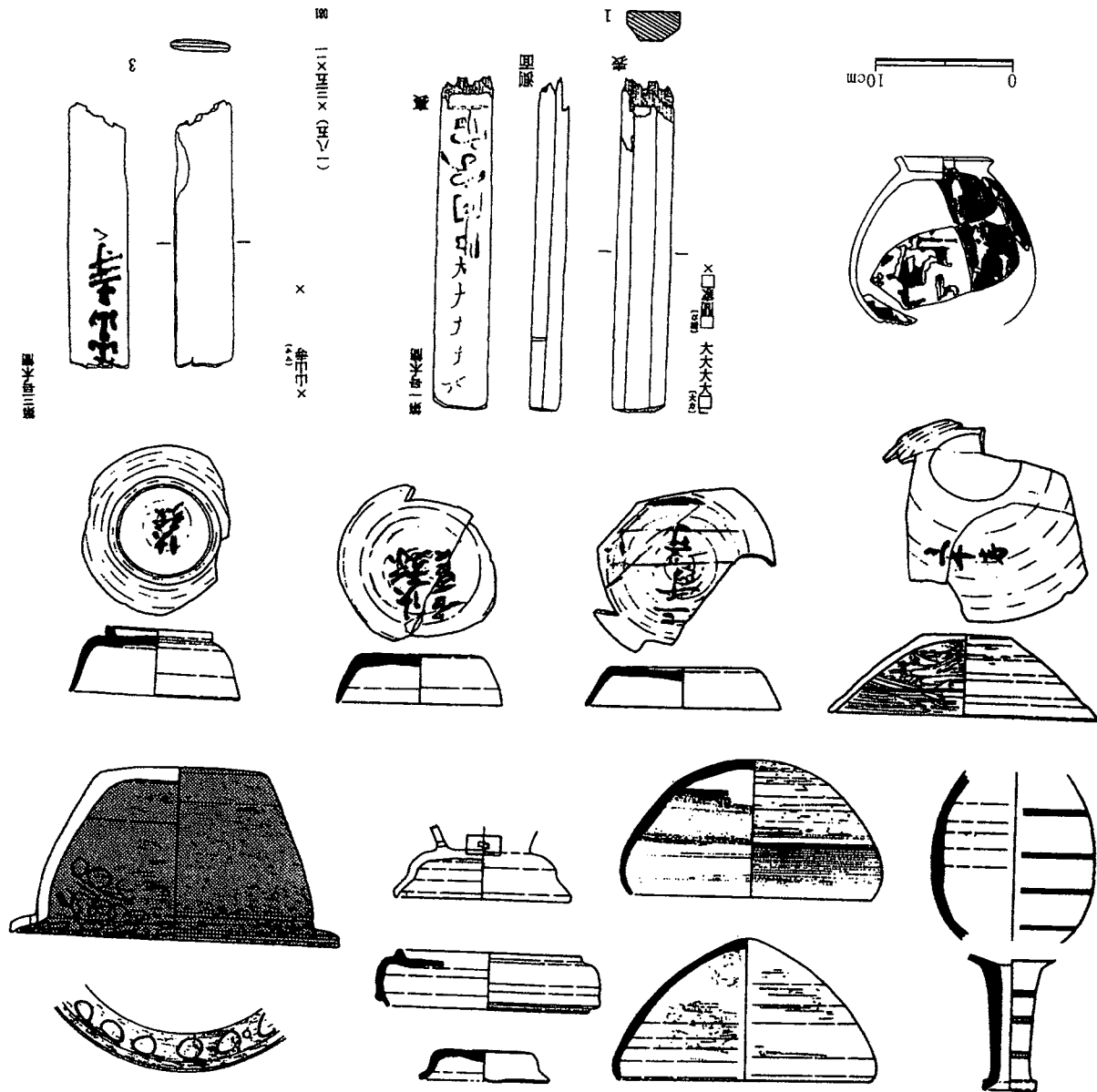
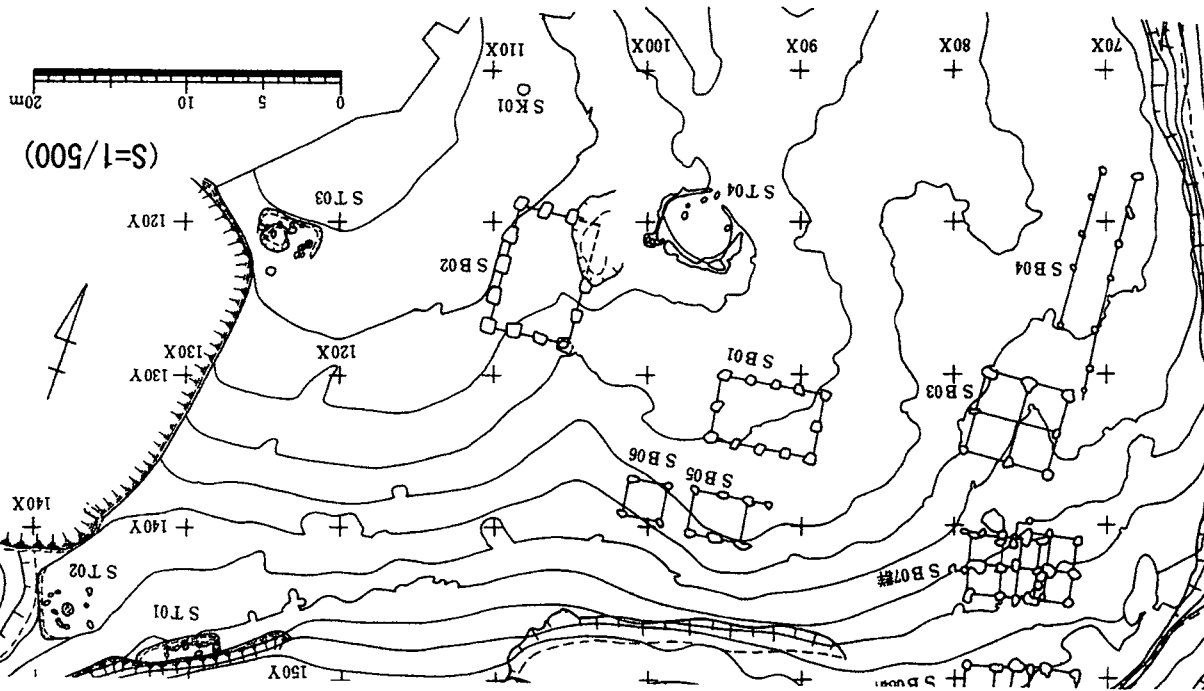
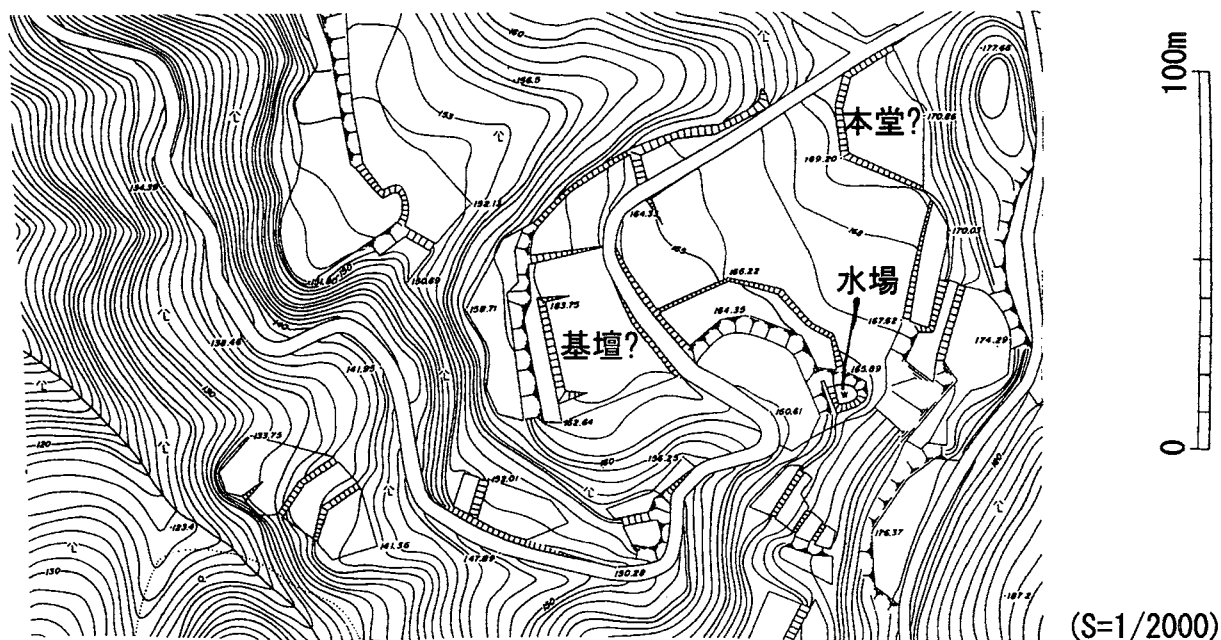


圖 11XIII X (中ノ1)

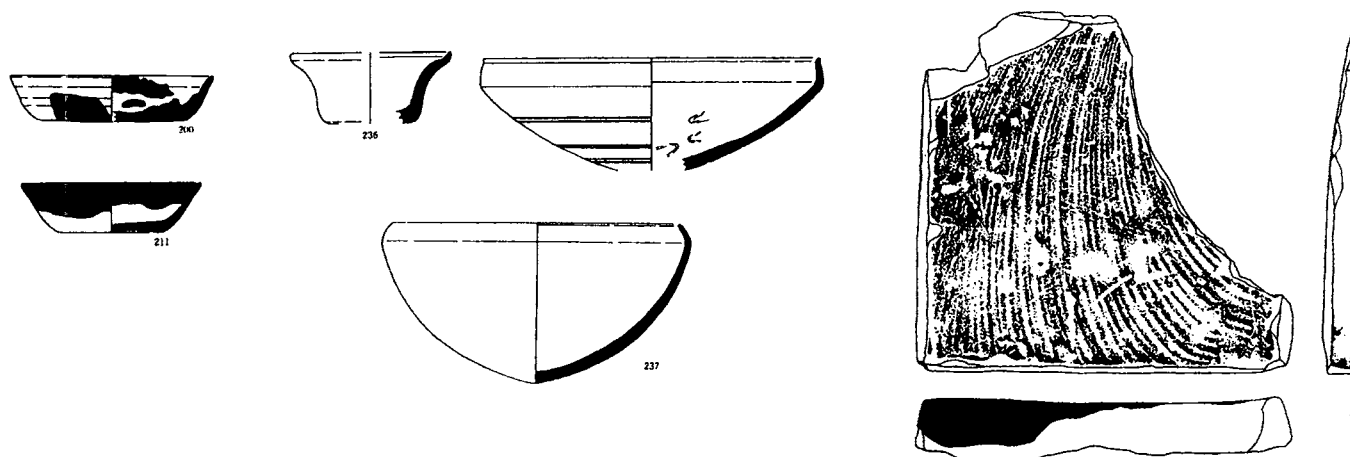
三小牛ノ遺跡

遺跡三小牛ノ

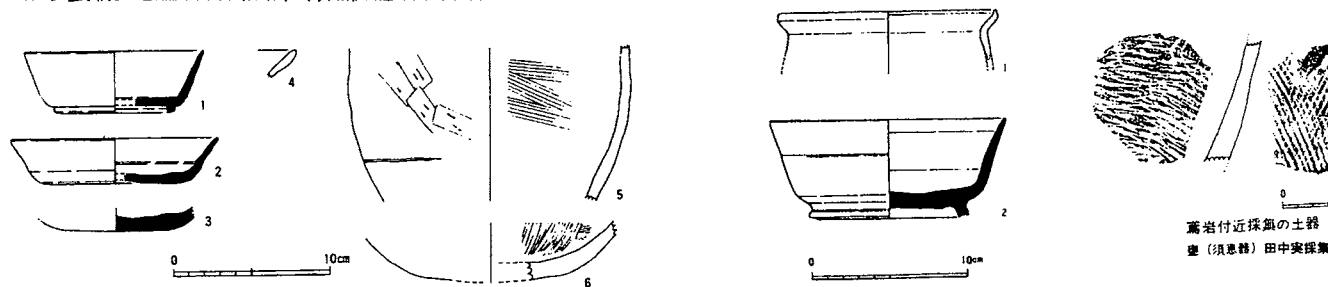
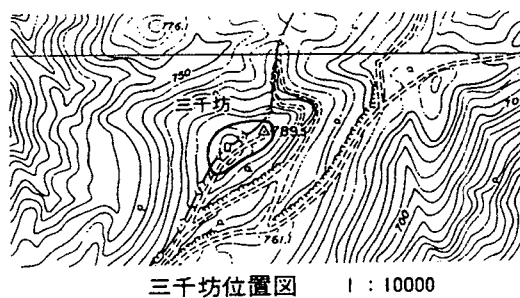
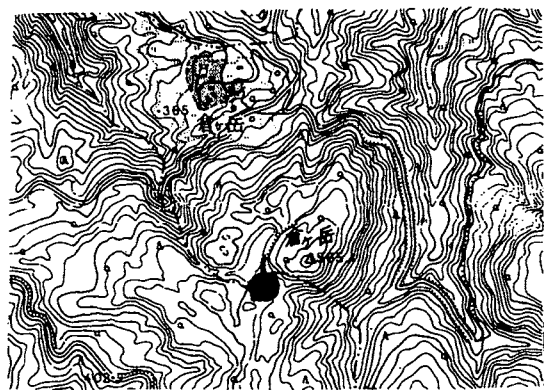




⑦高雄山寺推定地（金沢市）

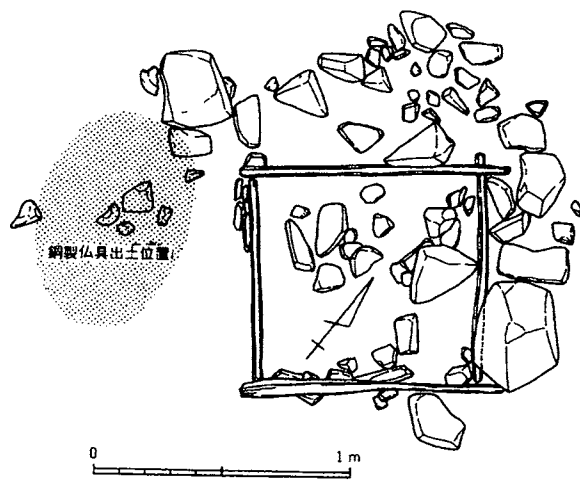
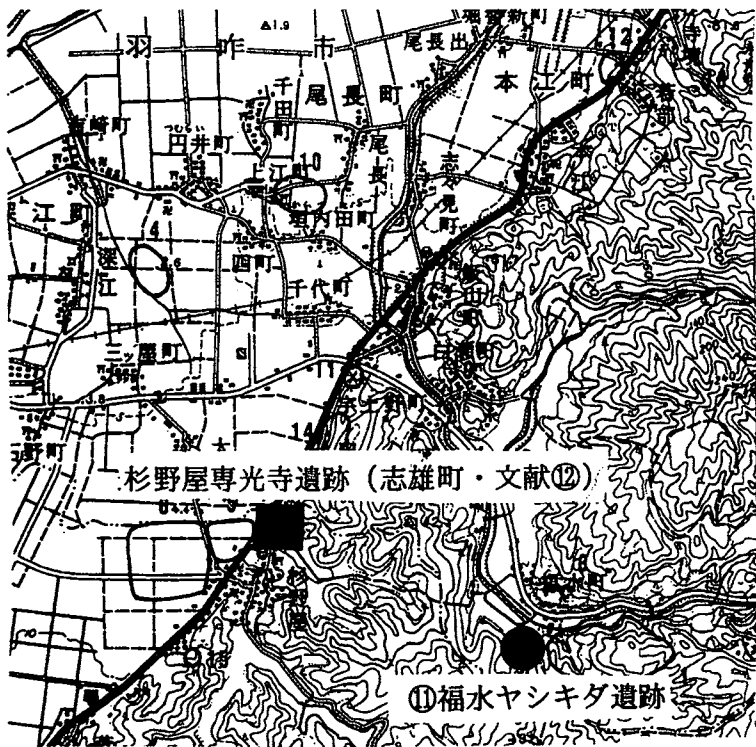


⑧額谷カネカヤブ遺跡（金沢市）



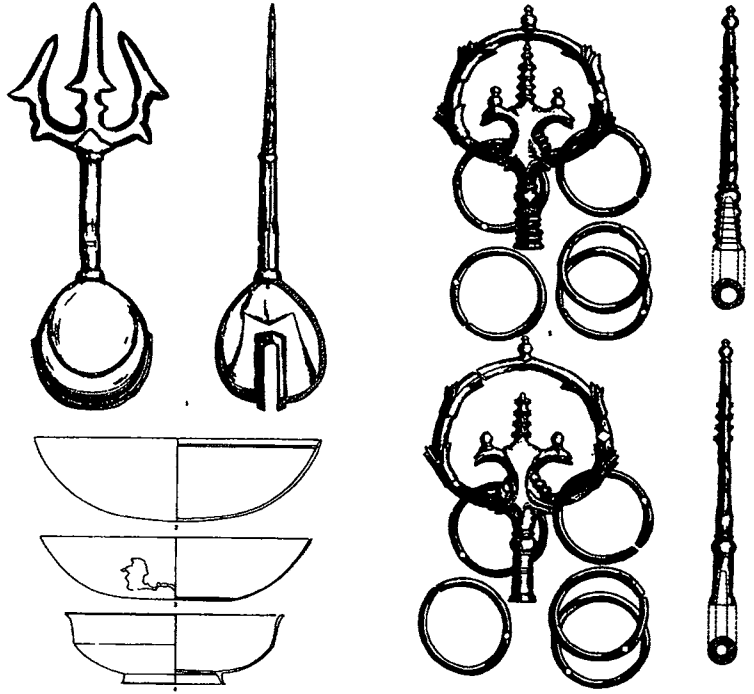
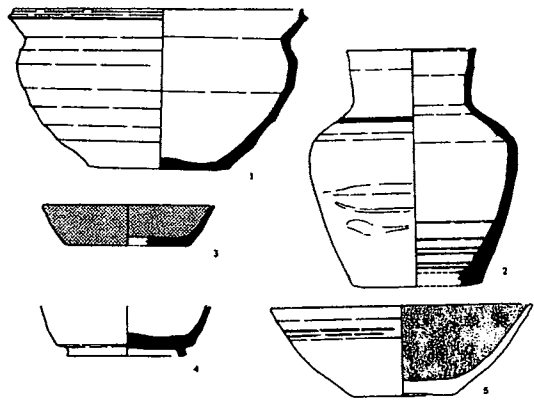
⑨倉ヶ岳山頂南遺跡（鶴来町）

⑩医王山 三千坊遺跡（金沢市・福光町）



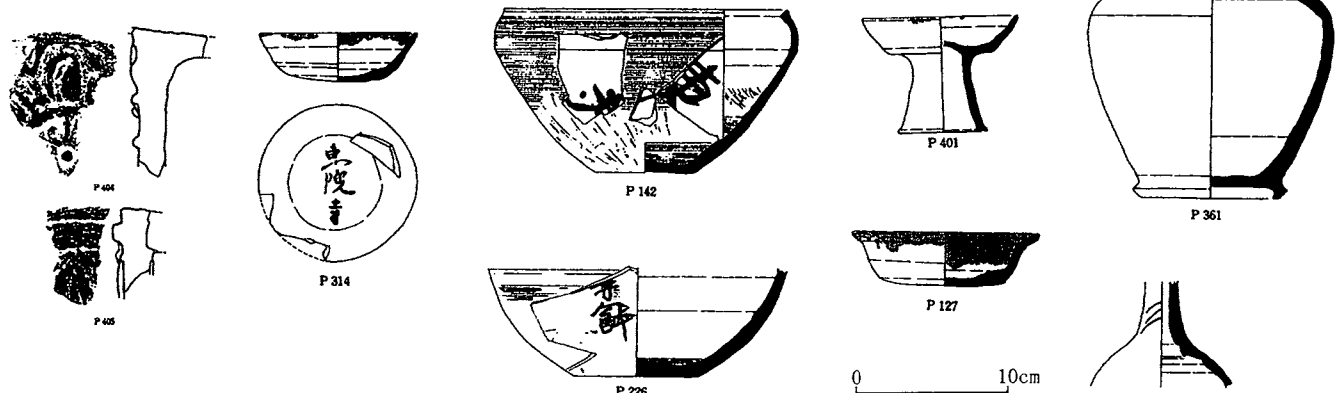
井戸状構実測図

1:50,000 氷見



福水ヤシキダ遺跡出土仏具

⑪福水ヤシキダ遺跡 (羽咋市)



⑫杉野屋専光寺遺跡 (志雄町)